

京都造形芸術大学学長 尾池和夫

京都芸術デザイン専門学校の卒業生、146名の皆さん、専攻科修了の12名の皆さん、まことにおめでとうございます。皆さんを含めてこの専門学校を出た方たちは、何と3171名となりました。すばらしいことだと思います。瓜生山学園を代表してそのことを心からお慶び申し上げます。

今日まで学習をあたたく見守りつつ支援してこられたご家族の皆さん、心からお祝い申し上げます。また、学習の場を与えつつ見守っていただいた企業、団体、自治体などの方々に深く感謝いたします。さらに学生たちの学習を厳しくあるいは暖かく導いてきた教職員の皆さんにも、瓜生山学園の役員の立場からお礼申し上げます。

今年の2月11日から皆さんの卒業制作展が、みやこめっせで開催されました。私はそのとき大学の行事、通信教育部の方たちが山陰海岸ジオパークを訪れて俳句を詠むという行事に参加するために出張していて、本番には行けませんでした。前日の設営の様子を見学させていただきました。そこでは、皆さんの熱気に満ちた活動を拝見し、また、大野木校長が遅れ気味と思われる展示の現場で、心配そうな顔で見守る様子も拝見しました。

次の日は京都府北部の豪雪でしたが、その中を蟹を食べたい執念で夜の久美浜に到着し、2日間の俳句の会を実行しました。俳句では春夏秋冬と新年の季節感を大切にします。今年の皆さんの作品の中にも、日本列島の大きな特長であるこの季節感をテーマにしたものがたくさんありました。私は俳人の立場からそれらに興味を持ちました。

例えば、伊藤由希さんは「立体絵本カレンダー「季節の物語」」で、開けたまま飾っておける絵本に暖かみのある情景を細かく描写しました。WANG PAI MIN (オウ ヒャクミン)さんは、「風呂四季 (いい思い出を包む)」というタイトルで、外国人の目で左京区の印象を食べ物で表現して包みこみました。ふたばの豆餅など、私の好きなものがたくさんありました。ちょうどその日、私も自分のためのデザインの大風呂敷を午前中に仕上げた直後であり、とても大きく共感しました。

他にも挑戦的な興味深い作品がありました。例えば、一居彩香 (いちいあやか)さんの作品は、「エジプト神メーカー・エジつく」で、神を創造しようという大胆な提案をしました。新しい重要な分野に貢献するテーマでは、山川将平さんの「笑福労災病院 (笑いと病院の場合)」という作品でした。医師たちの仕事の本質は患者を笑顔にすることという措辞はすばらしいと思います。ホスピタルアートは重要な分野で、今後とも大きく発展させていかなければならない課題です。

イラストプロダクトやゲーム、ストーリーマンガでは完成度の高い作品群にも目を見張りました。水安由希子さんの「私の大好きな動物達」での表現が素敵でした。デザインなどでは、赤崎弘治さんの「Encounter used bookstore」で斬新な設計思想を見せました。

皆さんの展示は、同時に多くの人たちに見てもらい、また皆さんの後を追う若者達のためのオープンキャンパスの場でもあり、今日、卒業される皆さんの後輩になる人たちも、たくさん見に来てくれました。

もう一つ大切なことは、1年生の皆さんの展示でした。粒ぞろいの個性あふれる作品群が見られ、来年の楽しみも保証されるということを確認することができました。

「ここは学校ではない。デザインオフィスである」という姿勢を基に、皆さんは技術だけにとどまらない、プロの姿勢やターゲットを見据えた創造力を身につけています。今日、卒業される皆さんが在学した京都芸術デザイン専門学校の、これがモットーです。そこで皆さんは学習し、それぞれの分野で実践的に活躍してきました。例えば今年の4月、瓜生山学園の春秋座で都をどりが開催されます。その機会に設定された株式会社聖護院八ッ橋本店の都をどり関連商品のデザインを皆さんの専門学校が担当しました。本番を控えて成功するしかないという緊張感がそこにあったことと思います。

普通は社会に出てはじめて厳しさに触れるのですが、皆さんは即戦力となるべく、デザインオフィスさながらの環境のもとで、このようにプロの世界を体感してきました。その厳しい環境に立ち向かう皆さんに敬意をはらいつつ、社会における皆さんの活躍に期待しつつ、さらに皆さんのご健康とご多幸を心から祈りつつ、私の今日のお祝いの言葉といたします。

ご卒業、おめでとうございます。

ありがとうございました。